

明治学院大学 キリスト教研究所 公開研究会

ライプツィヒ・バッハ音楽祭総監督 ミヒャエル・マウル博士講演会

「バッハに 燃え尽き症候群はあったか— バッハの晩年に関する新たな知識」

„Litt Bach an Burn-Out?
- Neuerkenntnisse zu Bachs späten Jahren“

ライプツィヒ・バッハ・アルヒーフ(所長:ジョン=エリオット・ガーディナー)は多岐にわたるバッハ資料の収集や『新バッハ全集』(1950-2006)の編纂などにみられるように世界のバッハ研究の中心だが、同時に、ライプツィヒ・バッハ音楽祭やバッハ・コンクールをも主催する世界のバッハ演奏の中心でもある。

ミヒャエル・マウル博士は、バッハ・アルヒーフ研究部門長として、祝賀アリア《すべては神とともにあり》BWV1127の自筆譜の新発見などの数々の業績で知られているが、昨年からはバッハ音楽祭の総監督の重責を担い、研究と実践の結合をさらに実り多いものとするを目標としておられる。本講演では、謎に包まれたバッハの晩年に関する最新の研究を披露される。



ドイツ語・通訳付き

2019年8月2日(金)19:00-20:30
明治学院大学白金校舎本館2階1201教室

講師:ミヒャエル・マウル
(ライプツィヒ・バッハ音楽祭総監督)

通訳:樋口隆一
(明治学院大学名誉教授・
明治学院バッハ・アカデミー芸術監督)

司会:加藤拓未
(明治学院大学キリスト教研究所協力研究員)

ミヒャエル・マウル博士略歴:
1978年、ライプツィヒ生まれ。
ライプツィヒ大学で音楽学、
マスコミ論を学び、2002年から
ライプツィヒ・バッハ・アル
ヒーフでバッハ研究に従事。
2006年、『ライプツィヒのバ
ロック・オペラ(1693-1720)』
で、フライブルク大学から哲
学博士の学位を得る。同書
は2007年、同書によりゲルハ
ルト・バウマン賞を受賞。
中部ドイツのバッハ資料発掘
の第1人者であり、2005年、
祝賀アリア《すべては神ととも
にあり》BWV1127の自筆譜の
発見、2006年、最古のバッハ
自筆譜(オルガン文字譜)の
発見は、従来のバッハ像を
書き替える画期的発見として
世界的に知られている。

参加無料
申込不要

お問い合わせ
明治学院大学 キリスト教研究所
TEL 03-5421-5210
MAIL kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp